北海道言語文化研究
No. 20, 155-162, 2022.
北海道言語研究会

徳島方言における第5類2拍名詞の拍内下降の痕跡について*

島田　武

On the Trace of Intramoraic Tonal Declination observed in Class 5 Bimoraic Nouns in Tokushima Dialect

Takeshi SHIMADA

要旨：本稿では、徳島方言における第5類2拍名詞のアクセントについて、拍内下降そのものは存在しないが、その痕跡が残っている場合があることを示す。先行研究によると、徳島方言では拍内下降が生じないかまれであるとの記述があったが、本研究で明らかになるのは、(1) 第2拍の母音を長音化可能であり、下降音調が顕在化できること、(2) 長音化された第2拍は2モーラ分の長さを持っており「拍内」下降ではないこと、(3) 助詞を付加されても、第2拍は長音化かつ下降音調の顕在化が可能である、ということである。

キーワード：徳島方言　拍内下降　第5類2拍名詞　アクセント　京阪式

1.　はじめに

本稿では、徳島方言の第5類2拍名詞のアクセントについて、話者の内省に基づく観察を行い、拍内下降の痕跡に関する報告を行う。

1.1. 京阪式アクセントと第5類2拍名詞の拍内下降について

日本語のアクセントに関して、金田一（1974）は、現代諸方言において同じアクセントの型に属している語を同じ類の語と呼び、2拍名詞に関しては5つの類[1]を認めている。以下に例をいくつか挙げる。

第1類：飴、梅、枝、牛、柿、蟹

[1] これらの類別語彙は国語学会編(1980)『国語学大辞典』によれば「過去の文献、ならびに現代諸方言の考察から、古い日本語において同じアクセントを持っていたと推定される語彙」のことである。元々はいわゆる祖語における類ということになるが、現代の日本語でも同一の類に含まれている語彙は同じ振る舞いを見せることが示されている。また本稿で見るような類の統合を考察する際にも有効な分類である。

第 2 類：歌、音、型、石、垣、紙
第 3 類：泡、池、色、足、犬、鬼
第 4 類：粟、糸、稲、息、臼、海
第 5 類：雨、井戸、桶、秋、鮎、黍

平安時代末期の京都においては、この 5 類の区別があったと考えられており、その末裔である現代の京都・大阪を中心とする京阪式アクセントでは、第 2 類と第 3 類が合流して 4 つの類が区別されている。

これらの類の中で、京阪式アクセントに特徴的なものが第 5 類である。第 1 類から第 4 類までは、第 1 拍と第 2 拍が高いか低いかが決まっているのに対し、第 5 類は第 2 拍内部において高低の変化があるとされる。その高低変化は拍内下降と呼ばれている。その高と低を「H」と「L」、下降を「F」を用いて表すと以下のようになる。

第 1 類：HH	飴	HHH	飴が
第 2 類：HL	歌	HLL	歌が
第 3 類：HL	泡	HLL	泡が
第 4 類：LH	粟	LLH	粟が
第 5 類：LF	雨	LFL	雨が

しかしながら第 5 類の第 2 拍の拍内下降「F」は常に現れるわけでなく、「H」のみが現れ、全体の型としては「LH」となる場合もある。その場合、単独形では第 4 類の「LH」と区別がなくなるわけであるが、従来は助詞がつくと、第 4 類は「LLH」、第 5 類は「LHL」となり、区別が可能であった。しかし近年は下記のように、「LF」から「LH」への拍内下降の消失、それに続き第 4 類の「LLH」が「LHL」と変化することにより第 5 類の「LHL」と統合されて、どちらも「LHL」となり、区別がなくなっているという報告がある（武田 2009、岸江・村田 2012）。

第 4 類：<u>LH</u>	粟	LLH > <u>LHL</u>	粟が
第 5 類：LF > <u>LH</u>	雨	<u>LHL</u>	雨が

1.2. 徳島方言の第 5 類 2 拍名詞のアクセントについて

京都や大阪に加えて、徳島にも京阪式アクセントが分布しているが、先行研究によると、徳島方言の第 5 類 2 拍名詞のアクセントと拍内下降については、以下のような記述がある。

（1）　金田一 (1967) :「京都・大阪の「]LF」がなく、代りに「]LH]」がある。」（表記の都合上、原文の下がり目を]で、拍内下降を F で表す。）

(2) 森 (1982)：直接の記述はないが、表 4 に「○●▹」の表記があり、拍内下降は表示されていない。

(3) 上野 (1997)：直接の記述はないが、表 2 に「○●▹」の表記があり、拍内下降は表示されていない。

(4) 仙波 (2006)：「第 5 類について付言しておく。この類は、半世紀前であれば「サ**ル**ー」（高く発音される部分を太字で示す）のように発音されたが、現在ではほとんど、このようには発音されない。1991 年の調査の際に、このような発音をする人も（藍住町には）いるということが話題になった程度」

(5) 仙波、村田 (2010)「阿波市阿波町の方言」：直接の記述はないが、表 4 に「LH・LH－L」の表記がある。

(6) 岸江・村田 (2012)：「徳島県の京阪式アクセントには拍内下降はない為，第 5 類単独形は全世代・全地点で LH となる。」

(7) 山岡 (2014)：淡路方言の 2 拍名詞第 4・5 類の調査の際に、鳴門方言を比較対象としており、その際に、「鳴門では全年齢層に共通して LF がほとんど聞かれなかった」と述べている。

(8) 村田 (2016)：直接の記述はないが、表 1 に「LH-L」および「L↑F-L」の表記がある（↑は「拍と拍との間で起点の移動［が］ある場合」に後続する F が H の位置から下降することを示す）。

(9) 峪口ほか (2017)「鳴門市の方言」：「第 5 類 2 拍目における拍内下降は基本的に実現しない」

これらを見ると、ほとんどの場合、拍内下降は生じないという記述であり、あったとしてもまれか、遠い過去に観察されていたと考えられている。

確かに、現在の徳島方言において、第 5 類 2 拍名詞では拍内下降がないと考えてもよいほどに談話の中ではめったに見られなくなっているが、その痕跡が全くないというわけではない。次節ではその痕跡を探っていくことにする。

2. 徳島方言における拍内下降の痕跡

2.1. 高田豊輝 (1985)

前節の金田一 (1967) において述べられているように、徳島方言に拍内下降が全くないとすると、方言辞書にもその記述はないと考えられる。しかし実際には、高田 (1985) による方言辞書には、拍内下降もしくはその痕跡が記述されていると推測できる例がある。

(8) アカー（赤）、アオー（青）、アゴー（顎）フナー（鮒）

(9) サラ／サラー（（道具や衣類など）おろしたて）、ハネ／ハネー（スズキの成魚）

(10) ハルー（春）、マエー（前）

(11) チヌ（クロダイ）、ツイ（露）

高田(1985)には、上記の(8)の例のように、長音記号「ー」が付されている例が多く載っている。この記号があることから分かるように、第2拍を長く伸ばし、音調も「LHL」[2]となる。通常は他の方言においてこれらのような例に対して拍内下降があると呼んでいる。ただし「LHL」の中の「HL」が拍内の下降なのか、つまり拍数が1なのかどうかは、表記からは分からない。次に(9)の例は、長音記号が括弧に入れられていた例であり、音調としては前者が「LH」、後者が「LHL」となるので、下降が随意的になっていることがわかる。続く(10)の例では、長音記号は付されているものの、それぞれ注釈がついており、「ハルー」は「ほとんど絶えてしまった方言。大方は戦後に絶えた」、「マエー」は「昭和生まれの人がほとんど使わない方言」とされている。しかし「春」と「前」という語はどちらも「LH」という音調で現在も使われているので、使わなくなったのは「LHL」という音調ではないかと考えられる。最後に(11)は、第5類の名詞ではあるが、長音記号が付されていない例である。高田にとっては第2拍は伸ばさないものとして認識されていると考えられる。

2.2. 母語話者の内省による拍内下降の痕跡の確認の条件

4.1節の高田(1985)の辞書の記述から、5類2拍名詞の第2拍を長く伸ばし、HLの音調で発話する例が多く見つかったが、それが「拍内下降」の用語通りに「拍内」での現象なのかどうかは不明であった。そこでそれらの例を母語話者の判断によって確認する。

ここで重要なのが、母語話者の選定の条件である。第2節の最後で述べたように、現在関西圏の京阪式アクセントの若年層の母語話者には、第4類が第5類に合流するという変化が起こっている（岸江・村田 2012)。そしてその前段階として必ず拍内下降の消失が起こっている。この変化は、徳島方言にも伝播し、1990年代後半の調査によるとその当時の30代以下の年代から第4・5類の統合が起こっている (岸江 2010)。これらのことを考えると、拍内下降の痕跡を探るためには、第4類と第5類が統合していない話者が必要となる。先行研究に従うと、徳島方言の第4類と第5類で、統合前の形は以下のようになる。

第4類：LH	粟	LLH	粟が
第5類：LF	雨	LHL, LFL	雨が

特に上記の例で助詞の「が」が後続するときに、第4類が「LLH」、第5類が「LHL」となり区別できることが重要である。

3. 方法

[2] 高田(1985)では、見出しの語のモーラ毎に「上中下」の文字が付されており、モーラの高さが分かるようになっている。凡例での説明によると、「上中下」は「ミレド」に相当する。ただし見出し語を通して見ると、ほぼ「中」と「下」のみが現れてる。例えば「アカー」であれば「下中下」と付してあり、HとLで置き換えると「LHL」となる。

3.1. 話者情報

話者：筆者

出身：徳島県鳴門市撫養町

性別：男性

生年：1970 年

居住歴：1970－1989.3　徳島県、1989.4 - 1999.9 茨城県、1999.10 – 現在　北海道

3.2. 拍内下降の痕跡探査法

先行研究によると、徳島方言の第 5 類 2 拍名詞には、拍内下降がないというものと、昔は存在したというものと、高橋(1985)という実例が掲載されていると考えられる辞典があったので、以下の 3 点の課題を内省によって判断することにした。

(12)　単独発話で、第 2 拍を長音化可能かどうか

(13)　長音化可能な場合、何モーラに相当するか。

(14)　助詞「が」「も」を付けた時に、第 2 拍を長音化可能かどうか

課題(12)では下降音調が可能かどうかを見る。加えて課題(13)では下降が拍内なのか否かを見る。下降が拍内であればモーラ数は増えないけれども、そうでなければモーラ数が増加することが予測される。最後に課題(14)では第 4 類との統合がされていないことを確認する。

4. 結果

課題(12-14)の結果は以下のとおりである。以下に課題を再度提示し、そこに結果を表示する。

(12)　単独発話で、第 2 拍を長音化可能かどうか

→可能。金田一類別語彙表、および高田(1985)の例の多くが第 2 拍を長音化できる。例：春　「ハルー、LHL」および「ハル、LH」が可能な音調である。

(13)　長音化可能な場合、第 2 拍に当たる部分は何モーラに相当するか。

→2 モーラ。例えば「春」は「ハルー」と発話すると、「ハ」で 1 モーラ、「ルー」で 2 モーラとなり、全体で 3 モーラとなる。したがって厳密な意味での拍内下降ではない。

(14)　助詞「が」、「も」を付けた時に、第 2 拍を長音化可能かどうか

→可能。これによって第 4 類との区別が明確になる。

5. 考察

本稿では、徳島方言において第5類2拍語の拍内下降の痕跡を探ってきているが、まず第6節の課題(12)の結果を見ると、通常の京阪式アクセントにおける広い意味での拍内下降は、話者によっては残存している可能性がある。これは先行研究の記述に反するものであるが、この結果は方法論の違いによって出てきたものと思われる。

大阪方言をはじめ、京阪式アクセントの先行研究において取られている方法は読み上げ式が主体である。読み上げる内容は「名詞のみ」、「名詞＋助詞・助動詞」、「文」というように様々な工夫を凝らして、できるだけ自然な状態と統制された状態の両方が取り入れられている。しかし、それらの方法では、「文字を読む」という条件の影響が不可避であり、そのために、文字に反映されていない第2拍の下降音調が顕在化しにくいのではないだろうか。一方課題(12)では、長音化可能性のみに注力できるため、より明確に下降音調を捉えることができる。第5類2拍名詞で下降音調を持つことのできる例を挙げると、以下の(15)のようになる。

(15)　下降音調を発話可能な第5類2拍名詞の例

日常語彙：雨、春、秋、声、汗、鍋

動物語彙：鮎、鯉、鮭、鮒、鰡、猫、猿、蜘蛛

色彩語彙：赤、青、白、黒

上記の語彙は第2拍を下降音調で自然に発話可能な例であるが、他の例の中にはごくまれに下降音調では発話しにくいものもある。筆者の場合、金田一語類の中から「蛭」が、高田(1985)の辞典の中から「煤」が、下降音調で発話すると不自然に感じる状態であり、ひょっとすると下降音調が消失する変化の途中なのかもしれない。ただし、助詞をつけると、「蛭がLHL」「煤がLHL」のように第2拍が高く発話されるので、それぞれ第5類に属していることは間違いない。

次に課題(13)で明らかになったのは、いわゆる「拍内下降」という用語の意味する、1拍内での下降が起きているのではなく、1音節内で下降しており、モーラ数は通常の長音と同様に増加するということである[3]。「春　ハルー」を音節に分けると、「ハ」と「ルー」になる。元々は「ルー」全体で1モーラであったのと言われているが、現在は「ル」で1モーラ、「ー」で1モーラとなる。実際に「ハル」は2モーラ、「ハルー」は3モーラであると感じられる。この点において、厳密な意味での拍内下降「F」とは言えないことが分かる。ただし「F」の持っていた「HL」という音調は保持されている。

最後に課題(14)に関して、第4類と第5類の例を比較して第2拍の長さの違いを見る。

---

[3] この長音化に伴うモーラ数の増加は、2拍名詞だけでなく、1拍名詞でも同様に起こる。

例：　火「ヒー　LH」　日「ヒー　HL」

これらは長音化しなければ1モーラの長さを持ち、長音化すると2モーラの長さになる。

(16)　第 4 類と第 5 類の比較（下降音調を保持している話者の場合）

第 4 類：針　ハリ　LH　針が　ハリガ　LLH　針も　ハリモ　LHL

第 5 類：秋　アキー　LHL　秋が　アキーガ　LHLL　秋も　アキーモ　LHLL

これら(16)の例を見ると、筆者のように単独発音で下降音調を保持している話者の場合、「秋が」や「秋も」のように助詞が加えられた場合でも「アキーガ」や「アキーモ」のように下降音調が保持できる。随意的になっている第 2 拍の「H」の後の「L」が顕在化し、全体で「HL」というメロディーが備われば、単独でも助詞が後続した場合のどちらでも、第 4 類と第 5 類の区別が明確であることがわかる。

一方、筆者とは違って、すでに下降音調を失った話者の体系は以下のようになる。

(17)　第 4 類と第 5 類の比較（下降音調を失った話者の場合）

第 4 類：針　ハリ　LH　針が　ハリガ　<u>LLH</u>　針も　ハリモ　LHL

第 5 類：秋　アキ　LH　秋が　アキガ　LHL　秋も　アキモ　LHL

上記(17)の体系では、第 4 類と第 5 類の違いは、「ガ」のような助詞の前で第 2 拍の高さが下線部の「LLH」一か所のみとなり、その「LLH」から「LHL」に変化するのが容易になっているのが見て取れる。このように比較することによって、岸江・村田(2012)の主張にあるような、第 4 類と第 5 類の統合に際しては、先に拍内下降（あるいは下降音調）が失われ、その後に類が統合されたという考え方に妥当性を与える結果となっている。

6. 結語

本稿では、徳島方言における第 5 類 2 拍名詞の拍内下降について、その有無と痕跡を探ってきた。従来の読み上げ式の調査では、第 2 拍の下降音調が顕在化しにくくなっていたと考えられ、先行研究では徳島方言には拍内下降は存在しないとさえ言われてきた。そこで話者の内省に基づいて判断をしたところ、第 2 拍の長音化と下降音調付与が可能であることが判明した。さらに長音化の際にはモーラ数が 1 つ増加した。これらのことから、厳密な意味での拍内下降は存在しないが、その痕跡が残っていると考えることができる。今後も話者の直感を利用して、第 5 類 2 拍名詞の変化を観察してくことで、徳島方言のアクセント体系の動向が捕捉しやすくなると考えられる。

参考文献

上野和昭 (1997)「総論」平山輝男編著『徳島県のことば』pp.1-28、明治書院

岸江信介・村田真実 (2012)「京阪式アクセントにおける 2 拍名詞の類の統合状況と低起無核型の消失傾向一大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に一」『音声研究』第 16 巻第 3 号、pp. 34-46.

金田一晴彦 (1967)『日本語音韻の研究』東京堂出版

金田一晴彦 (1974)『国語アクセントの史的研究　原理と方法』塙書房

国語学会 編 (1980)『国語学大辞典』東京堂出版

峪口有香子、岸江信介、仙波光明、久保博雅、坂田千春 (2007)「鳴門市の方言」『阿波学会紀要』第 61 号、pp.149-160.

仙波光明 (2006)「藍住町の方言」『阿波学会紀要』第 52 号 pp.157-166.

仙波光明、村田真実 (2010)「阿波市阿波町の方言」『阿波学会紀要』第 56 号 pp.169-174.

高田豊輝 (1985) 『徳島の言葉』教育出版センター

武田佳子 (2009)「大阪方言アクセントにおける二拍 5 類語の現在:三世代話者の読み上げデータからのケーススタディ」『阪大日本語研究』21 pp.109-127.

村田真実 (2016)「徳島方言における文末詞「デ」の音調と機能－徳島市及び近隣地域を中心に－」『音声言語』Ⅶ pp. 65-76.

森重幸 (1982)「徳島県の方言」『講座方言学 11 中国四国地方の方言』国書刊行会

山岡華菜子 (2014)「淡路島方言アクセントにおける二拍名詞第 4・5 類の合同傾向」早稲田日本語研究 (23)、pp.24-35

執筆者紹介

氏名：島田　武

所属：室蘭工業大学、ひと文科系領域

Email：shim@mmm.muroran-it.ac.jp